

徒然草三十一段の解釈をめぐって

水谷 隆*

(e-mail : midutani@yahoo. co. jp)

<目次>

- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 1. 問題の提示 | 2.2. 「いかが見る」で始まる歌の贈答 |
| 2. 徒然草三十一段の解釈 | 2.3. 徒然草三十一段の解釈とその背景 |
| 2.1. 「～いかが見る」という問いかけ
の意味するもの | 3. 付説 『徒然草』の本文に関して |

キーワード：徒然草 (Tsurezuregusa)、三十一段 (capture31)、いかが見る (ikaga miru)、
平安和歌の詞書 (kotobagaki in Heian period)、正徹本 (text written by Shotetsu)

1. 問題の提示

『徒然草』第三十一段は、

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何とも言はざりし返事に、「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。返す返すくちをしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。

今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。¹⁾

* 武庫川女子大学非常勤講師，日本古典文学

というものである。雪が美しく降り積もっていたある朝に、何か依頼しなくてはならないことがあって、兼好が誰かに手紙を送ったことがある。その手紙に対して、依頼先の人物が、「この雪いかが見る」、すなわち「この雪をどう見ますか」という言葉を一言仰らぬような「ひがひがしからん」、すなわち「情趣を解さないような」あなたの頼みを聞き入れることはできません、と、兼好の依頼を拒否してきた。それはとても「をかし」、すなわち「愉快的」ことであった、と記した上で、その人はすでに亡くなっているので、こんなちょっとしたことも忘れられないと、懐かしい気持ちが叙述されたものである。

この章段に記された「この雪いかが見ると、一筆のたまはせぬ」という言葉を、どのように解釈するかということについて、諸注釈は、「わたくしに、この雪を見てどう感ずるかとお筆もおっしゃらない」（安良岡康作『徒然草全注釈』）のように、美しい雪景色を目にした感興を共にしたいという主旨と見て一致している。

また、そうした美しい雪景色に対する感興を共にしたいという心情が生まれる背景として、

「古来、雪月花ヲモテアソブハ詩人歌人トモニ愛スル也。楽天ガ詩ニ、琴詩酒友皆於レ我雪月花時懐レ君ト作レリ」

（浅香久敬『徒然草諸抄大成』（1688）が「予が聞きをける説なり」として引用する一説）

「寒温の挨拶さへ一遍の書状の序にかかて叶はぬ事。まして雪月花は吟興に心つくすものなり。」

（恵空和尚『徒然草参考』（1678））、

この雪を何と見る。どうだよい雪景色ではないか。面白い歌でも出来たか、と

1) 本文は安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店 1967）による。ただし、踊り字は通常の文字に改めた。

いふやうな心持を含めた語と見てよからう。

(塚本哲三『徒然草解釈』(有朋堂1930))

などのように、美しい雪を目にしたときには詩歌を作るものであった、という指摘が早くからなされている。これらは無論、和歌四天王と評されたほどの、高名な歌人である兼好の著作として、『徒然草』を理解しようとしたものであるだろう。

さらに近年は、

「すばらしい雪景色ではありませんか。これをどう眺めておられますかという、雪見舞いの言葉。古の歌人達は雪の降った朝、しばしばそのような歌の贈答を試みている。」

(久保田淳 新日本古典文学大系『徒然草』(岩波書店1989))

…親しい人の訪れを待つ気持ちを伝えることや雪見舞に訪れることで、お互いの誠意や愛情を確かめ合い、共に雪見の風雅を分かち合おうとすることは、雪の朝のならわしであった。……『徒然草』第三一段は、……伝統的なならわしを忘れずに心がけ、優雅な振る舞いをした逸話によって、故人、すなわち趣深くイメージされた女性を追走する話である。

(齋藤彰『徒然草の研究』第二章の四の1「〈雪の朝〉の女性〔第三一段〕」1998)

などのように、雪見舞に歌の贈答をする習慣が、兼好の時代には、歌人たちにとって古くからの優雅な習慣であったと考えられるようになってきている。

ここまで引用してきたこれらの見解は、みな肯うべきすぐれたものであると私も考える。そうした中で、今回注目したいのは、

○この雪いかが見る この雪をあなたはどのように見るか。

このような場合の通用のあいさつなのであろう。「いかが見る」の例としては、

第二五段語釈「桃李もの言はねば…」の項に引いた弁乳母の歌がある。『和泉式部日記』に、「つねよりも雪のいと白きに『いかが見る』とのたまはせたれば」とある。あるいはこれをふまえた返事か。

(三木紀人 講談社学術文庫『徒然草(一)全注訳』 なお、和泉式部日記では「つねよりも霜のいと白きに」とあり、同書の引用に「雪」とあるのは、単純な誤記と思われる。)

という言及である。これは非常に示唆的であると思われる。ことに、「いかが見る」が「このような場合の通用のあいさつ」だという指摘は軽視すべきではないと思う。本稿では、この説の驥尾に付しながら、「いかが見る」という表現が、『徒然草』の時代にどのようなメッセージとして機能し得たのかについて、考えたい。

2. 徒然草三十一段の解釈

2. 1. 「～いかが見る」という問いかけの意味するもの

「いかが見る」あるいはそれに類する表現の早い例として、『後撰和歌集』の詞書に用いられたものが認められる。

兼輔朝臣のねやのまへに紅梅をうゑて侍りけるを、三とせばかりののち花さ
きなどしけるを、女どもその枝ををりて、すのうちよりこれはいかがといひ
いだして侍りければ

春ごとにさきまさるべき花なればことしをもまだあかずとぞ見る

はじめて宰相になりて侍りける年になん

(後撰和歌集 春上46 貫之)

藤原兼輔の屋敷の庭の紅梅が、植えられてから三年目にして初めて花を咲かせた。兼輔に仕える女房たちが、その花の付いた枝を折り取って、簾の内から紀貫之に「これはいかが」と差し出してきた。それに応じて、貫之が、「この紅梅は、これからさき、ますます美しくなっていくはずのものです。だから、今年の花にはまだまだ満足できません。」と詠んだものである。

これは、主人である兼輔の意を汲んだ女房たちが、歌人として知られていた貫之に、ようやく咲き始めた紅梅にたとえて兼輔を言祝ぐ歌を詠め、という意味合いで「これはいかが」と、いわば挑発したのを受けて、この年宰相に昇進し、公卿の身分となり、栄華の道を歩み始めた兼輔の将来を、今後ますます美しく咲きまさっていくであろう紅梅に喩えて予祝する歌で返答したものと理解できよう。

ここで興味深いのは、『後撰和歌集』よりも先に成立したと考えられる²⁾『貫之集』に、同じ歌が、

藤原のかねすけの中将さいさうになりてよろこびにいたりたるに、はじめて
さいたる紅ばいををりて、ことしなん咲きはじめてるといひいだしたるに
春ごとにさきまさるべき花なればことしをもまだあかずとぞみる

(貫之集 706)

と、兼輔が宰相に昇進した祝辞を申し上げるために貫之が彼の屋敷に行ったところ、兼輔が庭の紅梅を折り取って「今年咲き始めたものだ」と簾の内側から言ってきたのに対して、貫之が答えた歌として収められていることである。

『兼輔集』には、

2) 「家集の成立・編者は未詳。自撰の可能性もあるが、他撰でも兼輔没後、後撰集以前であろう。」(『新編国歌大観』第三巻「貫之集」解題)

兵衛のつかさはなれてのちにまへにこうばいをうゑて、花のおそくさきければ
宿ちかくうつしてうゑしかひもなく待ちどほにのみ匂ふ花かな

(兼輔集4)

と、兵衛府の任を離れた兼輔が、庭に紅梅を植えたのに、なかなか花の咲かないことを嘆いて「せつかく我が家の近くに移植したのに、なかなか咲き匂わない花であることよ」となかなか花を咲かせない梅でもって、昇進の機会に恵まれないわが身をたとえて詠んだ歌が見える。『公卿補任』に拠れば、兼輔が左兵衛佐の任を離れたのが延喜17年(917年)のことであり、そして、参議、すなわち宰相に任命された延喜21年(921年)の正月は、まさに、『後撰和歌集』の詞書が記す通り、それから3年後の春であった。兼輔の屋敷に普段から出入りしていた紀貫之は、3年前のこの兼輔の嘆きの歌を記憶していて、「春ごとに」の歌を詠んだのであろう。

『後撰和歌集』の撰者には、紀貫之の息子である紀時文も加わっているので、『貫之集』に収められた、兼輔と、父である貫之の交流の記録が、『後撰和歌集』編纂時に参照されなかったとは考えにくい。ならば『後撰和歌集』の詞書に「これはいかが」という言葉が書き記されているのは、同集の撰者たちが、「これはいかが」という文言を創作し、詞書に書き加えたため、という可能性が極めて高い。

『後撰和歌集』以後の勅撰集にも、同様の例が散見される。

元良のみこ承香殿のとしこに、春秋いづれかまさるととひ侍りければ、秋
もをかしょう侍りといひければ、おもしろきさくらをこれはいかがといひて
侍りければ

おほかたの秋に心はよせしかど花見る時はいづれともなし

(拾遺和歌集 雑下510)

元良親王が、醍醐天皇の女御の一人であった承香殿と呼ばれる女性にお仕えする女房であるとしこに、春と秋のどちらがその風情がまさっているかと訊ねたところ、としこが「秋も情趣深い」と答えた。そこで、再度親王が美しい桜を見せて「これはいかが」と訊ねると、としこが「私はおよそ秋の方に肩入れしていますが、このような美しい花を見るときには、もはや春も秋もどちらが良いと言えません」と答えたものである。としこが「秋もをかし」と言ったのは、「相手が春をよいと考えていると知っての返事」³⁾であり、この挑発的な発言に対して、親王は「では、この美しい桜をどうしてくれるのだ」と、挑発し返したのである。

ここでも、「これはいかが」と問われた人物が和歌で返答している。すなわち、「いかが」という問いかけは、歌を詠めという挑発的な気持ちを含んだメッセージとして機能しているのである。

さらに、『拾遺和歌集』では、この歌の詞書の「これはいかが」も、先の貫之の例と同様、同集の撰者によって創作されたものである可能性がある。

醍醐天皇と、その周辺の人々が詠んだ歌が収められている『延喜御集』に

大宮の、春秋いづれまされり、とおほせられければ、たいふ、秋ぞいとあ
はれ侍ときこえさせければ、さくらのめでたかりけるを、はるは猶わろく
や、とて、たまはせたりければ

ひとしれず秋にこころはよせしかど花みるときはいづれともなし

(延喜御集 27)

3) 増田繁夫 和歌文学大系 3 2 『拾遺和歌集』(明治書院2003) 当該歌の脚注

と、「いかが」ではなく「春は猶わろくや」、「それでも春は良くないというのか」という、これも挑発的な言葉を投げかけたという形で、『拾遺和歌集』と同じ歌と認められる歌が収められている。

『延喜御集』でこの歌を詠んだとされる「たいふ」は、同集の直前の歌にも「御乳母の命婦のむすめ、たいふの君とてさぶらひける人」（25 番歌、詞書）と見える。これと同一人物と思われる人が、『大鏡』第一村上天皇条に醍醐天皇皇子保明親王の乳母子として登場する。また『勅撰作者部類』では、保明親王乳母と記される。そうすると、保明親王の乳母なのか、乳母子なのかの認定は難しいものの、いずれにせよ、醍醐天皇の息子に近侍した女性には違いなく、したがって醍醐天皇の後のおそば近くにもいた可能性が十分に認められる。一方、先に見た『拾遺和歌集』の「承香殿」とは、醍醐天皇女御であり、そうすると「としこ」は醍醐天皇の女御にお仕えする女房ということになる。したがって、『拾遺和歌集』の「としこ」と、『延喜御集』の「たいふ」は同一人物と見ることが可能である。つまりは、両集の歌は、同じ場で詠まれた同一の歌を、別の形で記録したものと考えられよう。

このことと、『延喜御集』は、『拾遺和歌集』よりも早くに成立していたらしい⁴⁾ことを踏まえるならば、この歌については、元来、『延喜御集』のような形で伝えられていたものを、『拾遺和歌集』が収載するに当たって本文を改変したか、あるいは『延喜御集』と『拾遺和歌集』両集の伝えるような、二種類の形でこの歌が伝わっていたもののうちの一つを『拾遺和歌集』の撰者たちが選び取って収載したかのどちらかであると考えられる。そのいずれだったとしても、撰者たちは「いかが」とある方の本文を積極的に選んだのだ、という点では同じである。

さらに同様の例が、『詞花集』にも見られる。

4) 小林美陽「『延喜御集』についての研究」（信大國語教育9号 2000）

入道撰政やへ山ぶきをつかはして、いかがみるといはせて侍りければよめる

大納言道綱母

たれかこのかずはさだめしわれはただとへとぞおもふやまぶきのはな

(詞花 2 8 1)

これは、右大将道綱母のところに、彼女の夫である藤原兼家が八重咲きの山吹を送ってきて、「いかがみる」と、歌の名人であるおまえは、この花のことをどのように詠むのだと、使者を通じて挑発してきたので、道綱母が「いったいだれがこの花を「八重」と限定して名付けたのでしょうか。私には、八重ではなく、十重（とへ）すなわち、わたしのところを「訪へ（とへ）」と思われるのです」と、従者を送ってくるのではなく、あなたが直接来て下さいというようにやり返した歌である。

これと同じ歌が、『蜻蛉日記』諸伝本の末尾に添えられた『道綱母集』に

とのよりやへのやまぶきをたてまつらせ給へりけるに

たれかこのかずはさだめしわれはただとへとぞ思ふみでのやまぶき

(道綱母集 1 1)

と、「いかが見る」という言葉を持たない形で見える。この例でもやはり、『詞花集』が『道綱母集』のような形であったものを、「いかが見る」を含む形に書き換えたのだという可能性が十分に考えられる。

以上、見てきたことを総合すれば、桜や梅のような、歌の素材になるものを「いかが」と言う言葉を添えて歌人に示すことで、この素材に関する歌を詠めという、いささか挑発的なメッセージになること。さらには、こうしたやりとりを

経て歌を詠むことが、天皇の命に応じて編纂する勅撰和歌集に収載する、すなわち、天皇に対して提示するのにふさわしいありようとして認識されていたことが想定できるだろう。

こうしたことを、熟達の歌人である兼好が知らなかったとは、およそ考えにくい。したがって、『徒然草』三十一段の「この雪いかがを見る」とは、「この美しい雪を、あなたはどのように詠みますか」、という「通用のあいさつ」であり、挑発的なメッセージであったと読み解くべきだろう。これが小考の第一の結論である。

2. 2. 「いかがを見る」で始まる歌の贈答

以上に見てきたような、「いかが（見る）」という表現でもって、これを素材にして歌を詠んでみよ、と挑発するメッセージは、勅撰和歌集以外にもいくつか見出すことができる。

たとえば、『和泉式部日記』にも、この表現が用いられている。

同日記は、恋人であった為尊親王が亡くなり、悲しみに沈む式部のもとに、弟宮である敦道親王からメッセージが届けられるところから始まる。

世の中のはかなさを嘆きながら、築地塀に草が生えているのを「あはれ」と眺めていた式部は、透垣のもとに人の気配を感じる。それは、為尊親王にお仕えしていた顔なじみの小舎人童であった。彼は、頼るところを失ったので、かつての主人である為尊親王の弟、敦道親王のところに、身を寄せることになったと語る。

「…『つねに参るや』と問はせおはしまして、『参りはべり』と申しさぶらひつれば、『これもて参り、いかが見たまふとてたてまつらせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参

りなむ。いかが聞こえさすべき」と言へば、ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて、「なにかは。あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを。はかなきことをも」と思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると
と聞こえさせたり。

(和泉式部日記)

その弟宮が「つねに参るや」と、和泉式部の所には、しょっちゅう行っているのかとおたずねになるので、はいと答えたところ、「これもて参りて、いかが見給ふとて奉まつらせよ」と、これを持って行って、「どう御覧になるか」と言って差し上げよと仰った、と言って「橘の花を取り出で」る。

差し出された橘の花を目にした式部は、有名な古歌である

さつきまつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする

(古今和歌集 夏139)

を想起し、昔の人となってしまった為尊親王の思い出に浸る。けれども、返事を催促されて、「ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて」と、歌でないただの「ことば」でお返事を申し上げるのは「かたはらいたい」、すなわち、具合が悪いと思う。これは、前節で述べたとおり、「いかが見る」という言葉が、それに関する歌を詠めというメッセージとして機能しているがための式部の思いとみて間違いないだろう。そうしていささか躊躇はされたが、

かほる香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると

と、橘の花の香りで亡き為尊親王さまを思うよりは、弟宮であるあなた声を聞いてみたいものです、すなわち、一度お目に掛かりたいです、という、挑発的な内容の歌を返す。

そして、その歌を受け取った敦道親王は、

おなじ枝に鳴きつつおりしほととぎす声はかはらぬものと知らずや

と、同じ枝で鳴いていたほととぎすが同じ声をしているように、私の声と兄の声は一緒だと思いませんか、というこれも挑発的な歌を送り返す。このようにして、二人の歌の贈答が始まったのである。

また、別の例を見てみたい。平安末期の歌人であり、太皇太后宮亮をつとめた橘為仲の家集に次のようなやりとりが残される。

宮にさぶらふほど、うち殿よりもみちをたてまつらせたまひたりけるを、
をりてさぶらひにいだされて、これはいかがみるとありしかば、まうしい
れし

尋ねても吹きくる風のなかりせばいかでかみましょその紅葉ば

いそぐ事ありて、このうたのかへしもきかで、いでてたづねしかども、ほ
どのすぎたればにやあらむ、返しもなければ、すすきのを花ひとほあるを、
たはぶれに、かつら殿のすすきなり、昨日のうちのもみちと、いかが御覧
ずる、とまうさせたれば、しもつけのきみのいひいだされたる

秋ののの花が末をみねたかき紅葉の色にくらべざらん

(為仲集 5 1 / 5 2)

橘為仲が皇后宮に伺候していた時に、宇治殿、すなわち皇后藤原寛子の父である頼道の別荘から美しい紅葉が献上された。その紅葉を皇后にお仕えする女房の誰かが折り取って、為仲のいた詰め所に差し出して「これはいかがみる」と言った。そこで為仲は、「いくら探し求めても紅葉を吹き送ってくれる風がなかったら、つまり、紅葉を持ってきてくれる貴方がいなかったら、どうしてその紅葉を見ることができたでしょうか」と、紅葉の枝を差し出した女房の意に沿うような内容の歌を詠んで返した。けれども、急ぐことがあったので、自分が歌った歌への返歌も聞かないで外へ出かけて、後ほど詰め所にやってきて、返歌はどうだったと訊ねたが、タイミングを逸していたのか、返歌がなかったので、薄の穂を戯れに、「桂殿の薄です。昨日の宇治殿の紅葉と比べて「いかが御覧」になりますか」と、挑発的に申し入れたところ、下野の君という女房が、「比べるまでもなく紅葉の方が素晴らしいですわ」という趣旨の歌を返して来たというのである。

波線を付した部分から明らかなように、ここで「いかが見る」という挑発に応えて詠んだ歌には、その歌に対する返歌が、当然のように期待されている。そうした認識のあったことがわかるのである。

そのように考えられるならば、

二月ばかり、二条の大殿より、こうばいをいかがみるとてたまはせれば
ひとえだも身にしむむめのにほひかなこだかきやどをおもひこそやれ

御返事

はるごとくにほひまさればむめのはなこだかきやどはちよまでぞみん

(周防内侍集 86 / 7)

なども、「御返事」が返されるに至った経緯は何も記されていないけれども、先の例と同様に、「いかが見る」に応じて詠んだ歌には、当然のように、返歌があ

るものだという考え方が、特殊なものではなかった可能性を示唆する。

さらに、

大納言、せえう殿のおまへに、はなのいみじうちりければ、いかがみたま
ふと有りしかば

ちるこそはなのさかりなりけれ

ときこえしかば

さくさかずところもわかず吹くかぜは

(弁乳母集 2 1)

は、いかがであろうか。宣耀殿の前に花がひどく散っていたのを「いかがみたまふ」と試された弁乳母が、下の句だけを返した。その句に対して、「いかが」と訊ねた大納言が上の句を付けて、連歌を完成させている。こうしたやりとりが成り立っていることから、「いかが（見る）」というメッセージが「和歌を詠め」という挑発であっただけに留まらず、これを素材にして、「歌の贈答をしよう」という誘いかけとしても機能し得たことが想定されるだろう。

2. 3. 徒然草三十一段の解釈とその背景

ここまで述べてきたことを踏まえるならば、徒然草三十一段の「この雪いかが見る」という言葉は、「今朝の雪を題材に、歌のやりとりをしませんか」という誘いかけとして理解できる。

こうした誘いかけがなかったことを不満として、手紙の相手は兼好の依頼を断った。そこには、実用向きの要件よりも、風流な歌のやりとりのほうを重視する人物像が浮かび上がる。そうした人物の言動は、兼好にとっては「をかし」と感じ

られるものであった。

では、なぜ兼好は、申し入れを断られたのにもかかわらず、これを「をかし」と、好ましく感じたのであろうか。

実は、今まで見てきた「いかが（見る）」という言葉で詠歌を促す例を、鎌倉時代以後のものに見出すことは非常に困難である。それは、おそらく、こうした「いかが（見る）」で歌の贈答を始める、というあり方が、兼好の時代には、ほとんど行われることのなくなった、古めかしいものであったことを意味するだろう。⁵⁾

その一方で、『徒然草』に王朝的な優美なものへの憧憬がみてとれることは、早くから諸氏の共通して説くとおりでである。和歌についても『徒然草』十三段で、「古き歌ども」を同時代の作よりも高く評価し、

歌の道のみ、いにしへに変らぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへ
る同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすな
ほにして、姿もきよげに、あはれも深くみゆ。

と、その優れていることを述べる。このような志向を持つ兼好にとって、古き時代の振る舞いである「いかが（見る）」で贈答をすることは、やはり、望ましいことであったと考えられるのではないか。しかし、こうしたやりとりは、もはや行われることは、ほぼなくなっている。そこに時代を超越するかのごとき、この言葉が送られてきたことが兼好には「をかし」と、とても興味深く面白いと感じ

⁵⁾ こうした変化が起きたことについては、おそらくは、題詠という方法が発達し、歌を詠む場、同好の士が集まる場から、個人の呻吟の場へ変化したということが大きな原因であると想定されるが、本稿ではそうしたことを詳しく述べる余裕を持たない。

られたのであろう。この章段を以上のように解釈してみたい。

3. 付説 「いかがみる」の解釈から見た『徒然草』の本文

今回取り上げた『徒然草』三十一段の「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの」という部分は、烏丸本系統の諸本は、「のたまはせぬ」、伝東常縁本では、「のたまはぬ」。そして、正徹本の系統の本では「のせたまはぬ」とある。正徹本の伝える「一筆のせる」という言い方は例のない表現であるが、『徒然草』中に、「書きのす」という言葉が3例見られることから、およそ「一筆載せる」という意味で理解されている。このことについて、今少し考えたい。

以下に、いささか煩瑣になるが、同作品中の「書きのす」の例を全て示す。⁶⁾

賤しげなる物、みたるあたりに調度多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽に石、草木の多き。家の内に子孫の多き。人に逢ひて言葉の多き。願文に作善多く書き載せたる。

多くて賤しからぬは、文車の文、塵塚の塵。 (七二段)

これは、必要以上に多くあるものは賤しく感じられるということを述べたものである。この中で、神仏に願いを述べる文章である「願文」に、「作善」、すなわち自らの行った善行を多く「書き載せ」たのは賤しいと述べる。願文に作善を記すのは当たり前のことであるから、ここで「書き載せ」と言うのは、単に多く書き記すと

⁶⁾ 便宜として、以下に示す『徒然草』の本文は、正徹本を底本とする新日本文学大系『徒然草』による。

いうことではなく、必要以上の余計なことを書き加えている、ということであろう。

…この行長入道、平家の物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて、語らせけり。さて、山門のことをことにゆゆしく書けり。九郎判官のことは詳しく知りて書き載せたり。蒲の冠者の方はよく知らざりけるにや、多くのことども記し洩せり。武士のこと、弓馬の業は、生仏、東国の者にて、武士に問ひ聞きて、書かせけり。…

(二二六段)

この段は、平家物語生成の経緯を記したものである。信濃前司行長は平家物語を作るに際し、山門、すなわち延暦寺のことを格別に詳しく書いたという。そして九郎判官義経のことは詳しく知っていたので、「書き載せ」た。蒲冠者源範頼については、これをよく知らなかったためか、多くの事柄を記し漏らした。ここでも「書き載す」は、単に多く書くということではなく、標準値以上に書き加えている、と理解して差し支えないと思われる。

…昔の人はいささかのことをもいみじく自賛したる也。御の鳥羽院の、「御歌に、袖と袂と一首の内に悪しかりなむや」と、定家卿に尋ね仰せられたるに、

「秋の野の草のたもとかはなすすきほに出でてまねく袖と見ゆらんと侍れば、何事かさふらふべき」と申されたることども、「時に当りて本歌を覚悟す。道の冥加也。高運なり」など、ことごとしく記し置かれ侍るなり。九条相国伊通公の款状にも、異なる事なき題目をも書き載せて、自賛せられたり。

(二三八段)

この段では、昔の人はちょっとしたことでもひどく自賛したと述べる。その上で、後鳥羽院が一首の中に「袖」と「袂」という、衣に関わる同義語を用いているのはまずいだろうか、と所謂「同心病」を心配して、藤原定家に訊ねたのに対して、定家が古今集にある「秋の野の」という歌を即座に示して、「何かさぶらふべき」、全く問題はありませんと答えた。そのことを「必要な時に適切な証歌を思い出せたのは、非常によかった」と大げさに書き記したという例を挙げる。そして、さらにもう一例、九条相国藤原伊通が、官位などを望むに際して自身の功績を記す「款状」に、なんとすることも無い平凡な条目を「書き載せ」て自賛した、と述べる。この「書き載す」も、款状は、自らの功績を記すものであるから、単に沢山書いた、ということではなく「異なることなき」ことを余計に書き加えたことを意味するだろう。

以上見たように、『徒然草』中の「書き載す」という語は、本来は書き記さないようなことを余分に書き加える、という程度の意味で用いられていると考えられる。

ならば、正徹本三十一段の「この雪いかが見ると一筆のせたまはぬ」というのも、手紙の本旨とは別に一筆加える、という、現代風の言葉で「追伸する」とでもいうような意味として理解できるのではないだろうか。また、そのように考えられるならば、兼好が文を送った相手は、「この雪いかが見る」という言葉を、手紙の端にでも書き加えてほしかった、という控えめな願いをしていたと読めるだろう。そうした、控えめな願いと、それがかなえられなかったために抱いた「かへすがへす口惜しき御心なり」という強い言い方とのギャップもまた、「をかし」という思いを兼好に抱かせたものとして、得心できるように思う。⁷⁾

7) 『徒然草』正徹本は、その価値をもっと見直されるべきだという見解は、同本を底本にして注釈を行った久保田淳氏（新日本古典文学大系）をはじめ、島津忠夫氏「老のくりごと」38（2014.2.和泉書院ホームページに掲載）などでも見られる。今回の箇所も、この趣旨を補強する一例になるのかもしれない。

【参考文献】

- 浅香久敬 『徒然草諸抄大成』 (1688) が「予が聞きをける説なり」として引用する一説
恵空和尚 (1687) 『徒然草参考』
- 久保田淳 (1989) 新日本古典文学大系 『徒然草』 岩波書店、pp. 109.
- 小林美陽 (2000) 「『延喜御集』 についての研究」 『信大国語教育』 9、信州大学国語
教育学会、 pp. 86.
- 齋藤彰 (1998) 『徒然草の研究』 風間書房、pp. 225-6.
- 新編国歌大観編集委員会 (1985) 『新編国歌大観』 第三巻、pp. 854.
- 塚本哲三 (1930) 『徒然草解釈』 有朋堂、pp. 118.
- 増田繁夫 (2003) 和歌文学大系 3 2 『拾遺和歌集』 明治書院、pp. 95.
- 三木紀人 (1979) 講談社学術文庫 『徒然草 (一) 全注訳』 講談社、1979.
- 安良岡康作 (1967) 『徒然草全注訳』 上巻 角川書店、pp. 163.
- 島津忠夫氏 (2014) 「老のくりごと」 38, 和泉書院HP
(http://www.izumipb.co.jp/izumi/modules/pico/index.php?cat_id=8)

논문 투고 일자 : 2018. 12. 16. 논문 심사 일자 : 2019. 01. 31. 게재 확정 일자 : 2019. 02. 01.
--

 <要旨>

徒然草三十一段の解釈をめぐって

水谷隆

『徒然草』三一段で、ある人が兼好に送った手紙中の「この雪いかが見る」という言葉は、「この雪を見てどう感ずるか」という意味であるとするのが通説である。ところで、この「(～を)いかが見る」という表現は、平安時代の和歌集の詞書にしばしば見いだすことができるが、それらはみな、「～について歌を詠め」という意味で用いられている。したがって、高名な和歌作者でもある兼好の著した『徒然草』中の「この雪いかが見る」も、「この雪について歌を詠め」という意味で理解すべきだろう。また、兼好は「この雪いかが見る」と記した手紙を送られたことを「をかし」と感じていることにも注意したい。実は、「いかが見る」という言葉で詠歌を促す例は、鎌倉時代以後の文献には見いだしがたい。つまり、こうした和歌の詠み方は兼好の時代にはすでに古めかしいものであった。これも既に説かれているように、『徒然草』には王朝的で優美なものへの憧憬が強うかがわれる。そうした志向を持つ兼好にとって、古き良き時代の振る舞いである、「いかが見る」という言葉をきっかけとして和歌の贈答をすることは、「をかし」と評すべき、望ましいことであつたと考えて得心がいく。

『徒然草』のこの章段を以上のように解釈したい。

A Study on the Interpretation of the 31st Essay of *Tsurezuregusa*

Mizutani, Takashi

In the 31st essay of *Tsurezuregusa*, Kenko wrote that a person sent him a letter containing the phrase “konoyuki ikaga miru.” Most researchers interpret this phrase as “What do you feel about this snow?” The expression “ikaga miru” is often found in “kotobagaki” in the collections of tanka poems of the Heian era. In almost all cases, the expression is interpreted to demand that the poet compose a poem on a particular theme. Kenko had rich knowledge of Heian-era poems. Therefore, “konoyuki ikaga miru” in *Tsurezuregusa* should be interpreted as “compose a poem on the theme of this snow.”

Kenko also wrote that receiving that letter was a pleasant memory. The phrase “ikaga miru” implying the demand for a poet to compose a poem was already regarded old-fashioned and almost disappeared after the Kamakura era. In *Tsurezuregusa*, the author often expressed the yearning for the olden days. Interchanging poems by taking advantage of the phrase “ikagamiru” was very desirable for Kenko.

I would like to interpret this essay as stated above.